

問いへと導く女たちの声

「33年後のなんとなく、クリスタル」(田中康夫著)

時代は、前の時代を引きずる成分と新しい成分でできている。1980年執筆の「なんとなく、クリスタル」は、60年代の学生運動を内包した70年代を一掃し、約10年後に頂点を迎えるバブルを先取りした。もっとも著者が書いたのは、ブランドではなく選別のセンスのことだったが。

あれから33年。モデルで大学生だった由利に代わり、今度の語り手になるのは「僕」ことヤスオ。懐かしい女たちと再会し旧交を温める。卒業を機に外資系化粧品会社に就職、ロンドンの大学院で学んだ後、PR会社をおこした由利。再婚した江美子、モデルに復帰した直美、婦人科系の病を克服した早苗。それぞれの上に流れた時間は決してひと色ではない。

都心の一等地のpenthouseで開かれた女子会で、ゲストのヤスオは彼女たちの声に耳を澄ます。パスタのソースを褒める者あり、東京の中心部が限界集落になりかけていると語る者あり、ミラノ風カツレツを前に、夢破れて帰国する外国人看護師の話をする者あり。

同性として証言すれば、女たちはまさにこのように話す。美食も時事問題も子宮頸(けい)がんワクチンへの疑義も、同じまな板に載せる。女たちの率直さに押され、動揺しっぱなしのヤスオの姿もユーモラスな多声小説だ。

33年前、膨大な註(ちゅう)の後に説明なしで置いた少子化と高齢化に関する予測データ。直感に違いない。数字が示す未来は、何を豊かとするか、選別より重い選択のセンスを問われる時代になる、と。

本書の真の意義は、その直感に従って政治にも関わることになった田中康夫の33年間を描く自己言及小説でもあることだ。今回も熟読してしまう註は、田中の理念と手柄と挫折(全然めげてないが)の記録に見える。

まだ人口1億という量を目指しますか? 質に転換しますか? 後者を選びそうな本書の女たち。その問いかけのために、性事(ペログリ)抜きこの再会譚(たん)はあったように思える。

(温水ゆかり・ライター)

(河出書房新社・1728円)

共同通信配信